

発刊にあたって

—— 青い海、白い砂浜、広い空、そしてそこから湧き出る潮風と水平線から上がる大きい真赤な太陽—— 私たちの古里請戸の風景です。何年経っても何処にいても心から離れない風景です。そこに住んでいた時は、当たり前前の風景でしたが、今は懐かしいです。

大字請戸区の委員会は、震災一年後に二本松市男女共生センターで開催しました。その時から、いつも心にあったことは、請戸の歴史を後世に残したいと言う事でした。最初は、執筆者捜しに多くの時間を費やしましたが、今回ようやく発刊することが出来ました。

古里請戸には、延喜式内社とされる苕野神社や、大平山には多くの古墳群がありました。その昔、この地は相馬藩が領する前は、標葉氏が大平山の館たての内を拠点に活動していたと言う事ですが、地元に住んでも余り印象が薄く、御壇に「標葉公忠勲の碑」が建てられていたことと、本町の薬師堂に「鑄鉄地藏像」（町指定文化財）が祀られていたこと位です。詳しい請戸の歴史は、この本で明らかになることと思います。

歴史編の他に、古里を思う住民の思いや、今回の津波、そして原発被災の地区の実態等を調査し、その結果を載せました。自然災害の恐ろしさと、人災が再び繰り返されないことを祈っての事です。

また、請戸の全住民が古里を追われ、多くの苦難を強いられる中、請戸小学校の子どもたちが全員無事避難できたことと、安波様の田植踊がいち早く再開できたことは、私たちの心の大きな救いと支えになりました。その活動の様子をここに掲載しました。今後の発展と子供たちの幸せを祈りたいと思います。

この本の発刊に当っては、多くの方々に協力を頂きました。五人の歴史編の執筆者は、いずれも全国で幅広い研究や住民の支援に尽力されており、忙しい中での調査・執筆を頂きました。また、請戸地区の貴重な写真や歴史資料の提供には、浪江町、浪江町教育委員会、特に、行政区・広報担当や町史編纂室には、大変な御苦勞をおかけしました。また、町外の方々にも、写真提供や編集会場の提供など協力を頂きました。住民の方々からは、原稿や写真等を寄せて頂きました。此処に深く感謝申し上げます。

最後に、この本が、請戸住民のこれからの心の財産になれば幸いです。皆様方の子々孫々にわたったのご繁栄と、ご多幸を祈っております。

平成三十年（二〇一八） 陽春

大字請戸区長 鈴木市夫

発刊にあたって 大字請戸区長 鈴木市夫
大字誌発刊を祝う 浪江町長 馬場有

004
006

第一部 郷愁編

請戸のこえ―― 1 日本^の経済成長の犠牲となった双葉郡民 安倍一夫

020

請戸の初日の出
出初式
安波祭―― 1

014
016
018

安場祭―― 2

022

安場祭―― 3

024

請戸のこえ―― 2 近況 五十嵐 秀

026

請戸のこえ―― 3 あの日を忘れない（二〇一一年三月十一日 一四時四六分） 五十嵐英明

026

あの日 両竹区長 遠藤 健

027

請戸の学校―― 1

028

請戸のこえ―― 5 ふるさとの思い 中浜区長 川口 登

032

請戸の町並み

029

請戸の浜―― 1

030

請戸漁港

031

請戸のこえ―― 6 私が残して置きたい物 熊川 馨

032

母が遺したコルチカム 熊川美喜子

033

請戸川のにぎわい

034

請戸漁協新市場の夕市風景

035

請戸の浜―― 2

036

請戸のこえ―― 8 請戸の思い出 紺野廣光

038

請戸に暮らして 斎藤達夫、喜代

039

請戸の風習 佐山弘明

039

田植えど田園風景

040

請戸のこえ―― 11 心^の原風景 佐山 弘

042

請戸の一年 請戸区長 鈴木市夫

042

苅野神社遷宮

044

第三部 資料編

第一章
第二章
第三章
第四章
第五章

古代の請戸 松下正和
中世の請戸 泉田邦彦
近世の請戸 天野真志
近世の請戸湊 井上拓巳
近代の請戸 西村慎太郎

082
100
120
132
154

第二部 歴史編

報告 1
報告 2

請戸の田植踊 佐々木繁子
東日本大震災時の請戸小学校の記録 浪江町立請戸小学校

066
077

請戸のこえ
請戸のこえ
請戸のこえ

故郷は請戸 門馬文雄、けい子
心に残る風景 横山浩志
請戸の民俗芸能 渡部忍

062
062
063
064
065

請戸のこえ

海鳴り 伏見範子

052
054
056
058
060

請戸の神社・寺院
請戸の学校

2

請戸のこえ
請戸のこえ
請戸のこえ
請戸のこえ

請戸の美しい風景 鈴木京子
諏訪神社 竹添武
私の思い出 畑中武
請戸の海 日浅恵子

046
046
046
047
048
050

震災・原発被災の記録	東日本大震災の被害	天野真志	180
	歴代請戸区長一覧		182
	震災前の請戸の諸機関・寺社・遺跡等		183
人物抄 請戸の人	金澤マン	宮川教助	184
	品川一男	鈴木孝昌（文平）	185
		鈴木孝一	
	請戸区会議録		186
年表	『史料に見る請戸地区の歴史』		198
被災記録補遺	昭和三十五年（一九六〇）チリ地震津波と請戸		206
	編集後記	紺野廣光	208





安波祭出し物（請戸旧役場前） 昭和27年（1952）

安波祭の浜競馬（昭和初期）



安波祭 田植踊（鈴木酒造前） 昭和63年（1998）（西山 榮氏撮影）

安波祭 民家での樽神輿 平成16年（2004）（鈴木敏貞氏提供）





昭和63年(1988)



昭和63年(1988)



昭和63年(1988)



平成20年(2008)



平成13年(2001)



平成20年(2008)



平成13年(2001)



平成20年(2008)



平成13年(2001)



平成20年(2008)



平成13年(2001)

近況

五十嵐 秀（川原）

私は現在、娘の家に世話になっております。家族は娘夫婦と長男の孫一人と私と四人です。主として歩行が主な運動ですが、送り迎えがあるという事で週二回りハビリと二回デーサービスに通っております。週のうち木曜と土、日曜が何もない日ですが、その日は医院に行ったり買い物に行ったりで毎日、新聞や郵便を読んだりするのが主な日課で忙しいです。

毎日、肩こりや頭重、痛、息切れ、のどのつかえなどがあつたりで、整骨院にも行ったりしています。何とか寝たきりにならない様に努力したいと思っている毎日です。

請戸のこえ――3

あの日を忘れない

（二〇一一年三月十一日 一四時四六分） 五十嵐 英明（川原）

西に大平山の緑美しい山並み、東に母とも父とも言える太平洋。春先には、若鮎遡上する請戸川。あの日、あの時、地鳴り地震で母なる海は黒い帯に姿を変え横一線となって請戸地区を襲う。家並、父母、友人、何もかも奪い去る。

あの日を忘れてはならない。桜咲く請戸川河川古里でいつ逢えるのか

あの美しい緑の山、清き流れの請戸川、請戸の四季の移り

戸惑う人、支えあう心をなにもかもうばい人々さすらう

愛しい人は北に、私は南に、時止まる

あの日を忘れない なつかしい古里はいつも心の中に……

栄枯盛衰の気持ちを祈って よその県で終の棲家で暮らします。

本当にくやしい 東電の爆発さえ無ければ……。

請戸のこえ――4

あの日

両竹区長 遠藤 健（両竹）

あの地震の時は家でテレビを見ていた。揺れはじめた時はテレビをおさえていたが、その後の揺れで玄関の戸がはずれ、家の中にいられずすぐ外に出た。私の行政区は小さく27戸の集落であり、確認のため歩いて回った。その時に両竹で犠牲になった10人の内5名の人と会っていた。集落は山の下にあったので、すぐ山に登れば助かるのにと、残念でならない。その後、私は車で小学校に行く途中大津波の放送を知り、学校に誰もいない事を確認した。職員室のテレビはその時つかっていたようでした。すぐ外に出て浜街道に出た時には、南の方から黒ずんだすごく高いカベの様な光景が押し寄せて来た。津波でした。私有家のうらの山に登った一瞬の間に、家が流されてしまった。請戸地区全土が流出され、その上、182名の人犠牲になってしまった。津波が引いた後に山岸を北に歩いていると、ガレキの下からうなる声がし、ガレキをかき分けると若い女の人が1メートル位下の中にいた。夢中で一人で引上げガレキの上にねかし、1人ではむりであったため避難場所である諏訪神社にいる人を大声で呼んだ。そして5、6人で流れてきたマットに載せ神社まで運び寒かったので焚き火をして体を保温をした。神社には30人位の人がいた。塩水を飲んだ人、また骨折した人、かなり重症の方がいた。

その後、双葉町の役場職員が来て、重症の人や老人の方をマットに載せて500メートル先の車まで運んだ。その後、浪江町職員や自衛隊の人が来てくれ助けを受けた。その時の時刻は12日の午前2時位になっていた。寒くて皆んな喉がかわいて苦しんだ夜であった。女の人を助けた場所近くでうなる声が2～3ヶ所で聞こえていたが、暗くなったので助ける事が出来ず、今でも頭に残っている。

東電は、平成20年5月には実際に巨大津波を予見していたが必要な対策を怠っていたと指摘された。

国が、規制権限に基づき東電に回避措置を講じさせていれば事故を防げたと前橋地裁原発事故訴訟で東電の責任を認めている。

すなわちこれは、人災事故と私も思っている。

請戸港 昭和56年(1981)



請戸港(大正期)



請戸港 昭和50年(1975)

双葉造船所(中浜) 昭和18年(1943)1月8日 (鈴木重子氏提供)



沈没船「富貴丸」の積荷(鉄鉄)を運ぶ船人 昭和20年(1945)
(鈴木貞敏氏提供)



秋刀魚の陸上げ 大正11年(1922)11月5日 (門馬孝義氏提供)

「請戸の思い出」 紺野廣光（新町）

白い砂浜とそこに広がる太平洋の海原は、幼少のころから、たくさんの懐かしい思い出を残してくれました。

私の小学校時代は、子どもの遊びのほとんどは広い砂浜でした。夏ならば、砂で船を造ったり、砂浜で腹這いになりゲームをしたり、人数が多ければ陣取りゲームをしたりと、遊びは無尽に湧いて来ました。中学になる頃には、請戸港にも機械船が多くなりました。仕事帰りの船の隊列が、荒波に揉まれながらも船体を上下に揺らし突き進む姿は、爽快でした。中学を卒業する多くの男達は船乗りになり、若くして遠洋漁業に出ました。四倉や江名から出港する漁船は、請戸の人が乗っている時は、遠くから汽笛を何回も何回も鳴らしながら岸に近づきました。そして、苕野神社の東辺りで船を大きく揺らしながら何回も旋回し、参拝し終わるや全速力で一路北洋に向けて行ったものです。それを堤防で多くの人が手を振って見送る姿は、請戸の人たちの温かい風土になっていました。

また、請戸は気候・風土共に恵まれた地域でした。西に大平山古墳群があり、ここからは土器や横穴等が見つっていますが、昔から生活のしやすい場所だったのでしょう。そのあと中世期には標葉氏がここに館を築き、約二八〇年余りの間住みつき、近郷を治め、地域は農業と漁業を生業として栄えていたのでしょう。江戸末期は交易が盛んで、相馬藩の浜蔵の積出しや南部盛岡との鉄の取引等も

あり、請戸港は、多くの人で賑わっていました。その頃、地域の豊漁と豊作を祈願するお祭り（安波様）が苕野神社で始まったのでしよう。私の小さい頃は、安波様のときは男の子は神楽の後を、女の子は田植踊りの後をついて回るのが楽しみでした。私は、今でもその時の神楽の台詞を覚えています。「♪てんちーしちーだーい、みよのーはーるー……」。そして祭りが終わった後も、家から大きな布を持ち出しては近所の友達と神楽をして遊んだりしていました。

また、地域の女の人は、安波様を心待ちにしていた、招待する人にふるまう料理を作ることを楽しみにしていました。その日は、私の母も朝早くから準備をしていました。献立はいつも決まっていて、ほうれん草のオヒタシ、ポテトサラダ、魚（メバル）の煮つけ、コンニャクと人参の白あえ、にしめ、さしみ、そして鮭の卵が入った澄まし汁にホッキご飯でした。特に、アンコウのともあえは評判がよく、大変おいしかったことを覚えています。

請戸の浜は風光明媚で、魚もおいしく地域の人々の人情も厚く、住み易い所でした。そこを今回の震災で離れることは耐え難いことでしたが、避難している請戸の人々を勇気づけてくれたのは、安波様の田植踊と神楽でした。請戸の田植踊は、震災後五ヶ月で復帰し、避難民の心の支えになりました。地域の人がどこにいても、生まれ育った請戸の浜と、安波様は、忘れることはないでしょう。

請戸のこえ――10

請戸の風習 東向 佐山弘明（新町）

請戸は、一年中、風習・行事があった村である。

年の始めは、苕野神社へ元朝参りに行き、一番護摩を受け、早朝神棚に供え、しめ縄を飾り正月を迎えた。

二日は、船の出初め、請戸の浜、独特の風習である。

初午は、中島の神社の初午祭で馬札を貰い子供が肩につけ遊んだ。

二月二十四日には、苕野神社の安波様、本神興と樽神興が村内を練り歩き浜に下りた。本神興は船主と漁労長や船長など船の役付きだけが触るものと言われた。

お盆は、六日に、苕野神社の夜ごもりで盆踊り、十三日には迎え火を焚き、十四日の朝晩、十五日の晩、十六日の晩と三日にわたり墓参りをした。三日間お墓参りするのには請戸だけの風習である。二十日は、こんじんの夜ごもりもあった。

十月は、権現様の秋祭り、栗ご飯を供え豊作に感謝した。

十二月は、恵比寿講、神棚に生きた小鮒を供え祭った。

大晦日の晩は、正月を迎えるため、神棚の前にお膳を供え、供え物には、必ず塩鮭があった。

請戸のこえ――9

請戸に暮らして

斎藤達夫・喜代（本町）

今の時代に、日本の国に、生を受け気候風土の良い、浪江町請戸の土地に、人情厚い人々と暮らせる事に幸せを感じながら50年の歳月が流れました。情け深い人々や、活きの良い魚介類、波を鎮める安波様祭り、樽みこしの威勢の良い掛け声、踊り子さん達の歌や踊り、神楽の笛太鼓、脳裏にきざまれ忘れる事出来ません。

突然の大きな三つの災難に会い、恐怖を感じました。この災いにあたって、一番つらく苦しかったことは、津波によって尊い命を亡くされた方々との耐えがたい別離で



引き波 平成二十三年(二〇一一)三月十一日 (福島県警察提供)



成立は早くとも八世紀前半と新しく、一方当郡域の古墳分布は六世紀以降を境に浪江町域から双葉町域に移行することをふまえると、必ずしも双葉町域のみを標葉郡の中心とする必要はないという説もある（『法政大学文学部考古学研究報告 第一冊 本屋敷古墳群の研究』法政大学、一九八五年）。今後、古代集落遺跡の発掘事例が蓄積されることで、郷域の解明が進むだろう。

41 『原町市史 第四巻 資料編二』（原町市、二〇〇三年）。

42 氏の名やカバネは家格を示し、官位の昇進とも関係するため、奈良時代より平安時代初頭まで氏の名あるいは氏の名とカバネ（氏とカバネをあわせて姓という）を改めている例が多くなる。官人としての地位が上昇した際などに、以前より良い新たな姓が与えられた。

43 八世紀以降、官人の朝廷内での序列を示す標識。大宝令で正一位から少初位下の三〇階が規定され、内位とよばれた。一方、地方

豪族には通常、外五位上から外少初位下の二〇階（外位）が与えられる。

44 大化前代に朝廷、大王・后妃・王子や中央豪族に隸属し、種々の労役や生産物の提供を行う人々を部あるいは部民とよんだ。

45 諸院諸宮王臣家や五位以上などの権勢のある家の人々。

46 郡司を伝統的に輩出する氏のこと。

47 漆漬けの状態で出土した古代文書。漆の状態を良く保つため、漆入りの容器のふたをした紙に漆が染み込み、土中で腐食せずに残ったもの。その際用いられる紙は多くの場合、公文書の反故紙であるため、古代資料の貴重な発見につながる。

48 延暦二十一年（八〇二）に坂上田村麻呂が陸奥国の胆沢の地（現在の岩手県奥州市水沢区佐倉河）に築いた城柵。

49 軍団とは律令制下の軍事組織。二〜四郡に一軍団が置かれ、一戸のうち正丁（二一〜六〇歳の男子）三

古代標葉郡に関わる人名 大化前代における標葉地方の支配には、天湯津彦命を祖と仰ぐ染羽国造らが関わっていたことは先にも述べた通りです。それでは律令制下の標葉郡に関する人々にはどのような人々がいたのでしょうか。『続日本紀』によると神護景雲三年（七六九）三月十三日に道嶋宿祢嶋足（みちしまのすくねしまたり）の申請によって陸奥国の人々に賜姓したという記事が見られます。白河郡の外正七位上 丈部子老や賀美郡の丈部国益とともに、標葉郡の人で正六位上の丈部賀例努（はせつかにいべの）ら十人が阿倍陸奥臣という姓が与えられています。丈部賀例努という人物は他には見られず経歴はよくわかりませんが、地方で「正六位上」という位階（内位）を持つているため標葉郡の中でもかなりの有力者であったと思われます。地域社会の中で位階を持っていたのは地方官庁で何らかの職に就いている役人や、位階を持っても職に就いていない外散位と呼ばれる役人か、都での勤務を辞めて帰郷してきた者がほとんどでした。丈部氏はもともと宮廷の警護や雑使を担当した軍事的部民であったと考えられています。東国地方に多く大化前代において東国に重点的に丈部が設置され、国造ら地方豪族の一族が伴造に任命されたのかもしれない。なお、阿倍陸奥臣という姓は阿倍十地名という複姓と呼ばれているもので、阿倍臣の系統と考えられます。八四頁でも述べたように『日本書紀』によると阿倍氏の始祖とされる大彦命は、

職員で、中央官庁だけではなく地方官庁にも置かれていたようです。つまり、この文書に見える宗何部某は、標葉郡衙の書生だったことがわかる貴重な史料です。宗何部は蘇我部などとも記し、蘇我氏の部民でした。多賀城漆紙文書（第一号文書）には宗何部真縄の名が見えます。また先に見た神護景雲三年（七六九）の標葉郡の丈部賀例努が賜姓された同じ記事にも、日理郡の人で宗何部池守という人名が見えます（『続日本紀』）。また胆沢城跡出土漆紙文書（第一八号文書）にも小田軍団から胆沢城に派遣される兵士の欠勤届の中に、宗何部刀良麿が流行病で倒れたことが記されています。『続日本紀』の宝龜三年（七七二）七月辛丑条にも上総国天羽郡の人で宗我部虫麻呂の名が見えます。このように陸奥国に宗何部が展開している様子はうかがえますが、元々は上総国の宗我部と関係するのではないかと言われています。

第三節 人々の信仰と伝承

（一）古代史料に見える標葉郡の神社

式内社苕野神社 『延喜式』の巻第九・第十（いわゆる神名帳）

四道將軍として北陸（『古事記』では高志道）に遣わされています。『古事記』では高志道を経由した後に「相津」で子の建沼河別と出会ったとあります。また『日本書紀』垂仁二十五年二月条では武渟川別（『古事記』では建沼河別）は阿倍臣の遠祖とも見えます。武渟川別も、四道將軍の一人で東海（古事記では東方十二道）に派遣されます。このように阿倍氏の遠祖と陸奥とは密接な関係をもつて伝承上に登場します。中央において雑用に使われた丈部と、それを中央で統轄する阿倍氏という伝統的な関係から、丈部が阿倍の複姓のかたちで改賜姓されたものと考えられています。都にいる権門勢家や国司などとのつながりを求めつつ、地域社会の中で勢力を拡大していこうとする標葉郡の丈部氏たちの動きを読み取ることができそうです。

また、『続日本後紀』嘉祥元年（八四八）五月十三日には標葉郡擬少領の陸奥標葉臣高生ら八戸の人々に阿倍陸奥臣の姓が与えられたとあります。少領とは郡司の次官のことですが擬少領（太政官から正式に補任されていない郡司）とありますので、先に見た丈部賀例努と同様に阿倍陸奥臣を与えられたこれらの氏族は標葉郡の郡領氏族であった可能性があります。

他には、多賀城漆紙文書には「書生宗何□標□」とあります。書生とは律令制下において書写を職務にした下級



苕野神社の刷物（鈴木幸一氏提供）

〔表4〕 年別請戸鰹漁獲高（福島県水産試験場『大正七年度事業報告』三四〇三七頁）											
大正二年			大正三年			大正四年			大正五年		
年月	尾数	金額（円）	年月	尾数	金額（円）	年月	尾数	金額（円）	年月	尾数	金額（円）
六月	〇		六月	〇		六月	六六	六	六月	一、四七八	四五六
七月	九、四九二		七月	〇		七月	四五、七一〇	一〇、一〇八	七月	九、四〇一	二、二二三
八月	三八、六四〇		八月	一三、五八〇		八月	六、五五〇	一、七二三	八月	二七、八三九	七、九六九
九月	四三、七〇五		九月	四二、一〇〇		九月	八三、九七〇	一八、二九六	九月	二、七五〇	七三五
十月	二七、六八六		十月	一〇、五二六		十月	四一、四八七	六、六〇四	十月	一、一九一	一七四
十一月	〇		十一月	〇		十一月	〇	〇	十一月	〇	〇
合計	一一九、五二三		合計	六六、二〇六		合計	一七七、七八三	三六、七七	合計	四二、六五九	一一、五五六
									大正六年		
									年月	尾数	金額（円）
									七月	〇	〇
									八月	一〇、〇九二	二、七三三
									九月	二、七三三	五、四四三
									十月	六、六七〇	三、六七二
									十一月	一、八六二	一、六六九
									合計	三、三五四	一、七三七
									合計	一九、七〇八	一〇、九三八

の地域では十一月まで出漁しているところもありましたが、請戸は十月までであり、とりわけ九月が最盛期でした。大正四年・五年・七年には六月にも鰹漁が行われていますが、大正四年の『福島県水産試験場事業報告』は確認できなかったため詳細は不明。大正五年は例年に比べて鰹の来遊が早かったため（理由は不明）。そして、同七年は例年に比べて水温が低かったようですが、犬吠埼（千葉県銚子市）から北上した暖流が寒流の影響によって支流を作り、茨城県川尻（現在の千葉県日立市川尻町）沖合あたりまで延びていたため、鰹群がここに回遊していたことで漁が行われました。

それでは鰹漁の推移について、大正三年から『福島県水産試験場事業報告』に景況が記されているので検討してみましよう（写真1）。



写真1

こと、狭かったことが原因で前年に比して三分の一程度の漁獲高となっていました。

大正六年、海水温が低く、県内の漁師の中には千葉県沖まで出漁する者もいたようですが、結局、釣り上げることができず、六月は県内の水揚げが皆無でした。福島県水産試験場の調査船である磐城丸は六月十八日より二十一日にかけて鰹漁場調査を行っています。塩野崎（福島県いわき市）東方一三〇キロから一七〇キロの海上に鰹群がいて釣り上げを試みましたが、餌付けの魚群がなかったため、結局一匹の鰹も釣り上げられなかったようです。七月五日から七日にかけて海上が荒天になったことでようやく鰹が回遊してくるようになりました。しかし、餌となる鰯が十分に獲れず、前年よりも漁獲量を減らすこととなりました。なお、この年の十月には太平洋沿岸部に大きな爪痕を残した台風による高潮災害がありました。具体的な請戸の被害は判然としませんが、既述の磐城丸をはじめとして、福島県内大小の漁船に被害が出てしまいました。

大正七年は早い段階で茨城県川尻沖合あたりまで暖流の支流が来ていたため、鰹群が回遊してきており、請戸の人びとも六月から出漁していましたが、八月五日からの荒天によって漁ができないばかりか、鰹自体が小さかったようです。

このように鰹という天然資源相手は多くの苦勞と困難があ



写真2（品川 清氏提供）

ったことがうかがえます。

では、どのような船で漁に出たのでしょうか（写真2）。写

大正三年、六月から八月十五日くらいまでは海上に鰹の姿を見ることはありませんでした。請戸も全く不漁であったことが表4からうかがえます。八月十四日・十五日に時化となったため、鰹が近海に回遊してきて、ようやく漁をすることができましたが、この年は東北の沿岸一帯で不漁でした。

大正四年は、既述のとおり『福島県水産試験場事業報告』の存在が確認できずに詳細は不明ですが、他の年と比べて段違いに豊漁で一七万七千尾もの水揚げがありました。

大正五年、石油高騰のために出漁を見合わせざるを得ない県内の漁師もいたようです。これは大正初年より漁船の補助として「石油発動機関」の普及が奨励された弊害によるものと思われます。一方で、鰹の来遊が早かったため、初漁自体は例年よりも早く五月二十四日でした。漁場が遠隔であった

二〇一一年三月十一日に発生した大地震と津波は、東北地方太平洋沿岸を中心に大きな被害をもたらしました。この請戸にも様々な影響を及ぼし、現在も多くの問題を抱えています。ここでは、東日本大震災がもたらした被害について概観するとともに、請戸地区の人びともたらされた影響について見ていきたいと思っています。

三月十一日十四時四十六分、三陸沖を震源とするマグニチュード九・〇の地震が発生しました。浪江町では震度六強を計測し、さらにその直後に発生した津波は、浪江街に一五・五メートルの高さが確認されています。これらの影響で、請戸地区では二〇一五年現在で合計一二七名の方が亡くなり、二七名が行方不明となりました（表一）。

地震・津波の発生後、浪江町では本庁に災害対策本部が設置されました。しかし、東京電力福島第一原子力発電所の事故が発生したことから、浪江町には三月十五日に二〇〽三〇キロメートル圏内に避難指示が発令され、災害対策本部および避難所は二本松市内に移されることになりました。

災害発生直後、浪江町内には多くの避難所が開設されました。翌三月十二日には、津島地区避難所への移動がおこなわれ、国道一一四号は大混乱を起こしました。さらにその後、二本松市への避難がおこなわれました。

◎アンケートから見る請戸地区の状況
本書を刊行するにあたり、請戸地区では、平成二十八年七月に

震災時の行動に関するアンケートがおこなわれました。アンケートは大字請戸区長によって四八七名に配布され、請戸区一三六名、中浜・両竹区一七名、合計一五三名からの回答が得られました。アンケートの項目に沿って震災当時の状況を確認したいと思います（表二）。

地震発生当時、半数以上の方々は請戸地区の外にいました。そのこともあってか、地震の直後に発生した津波を目撃しなかった方が全体の半数以上を占めています。

一方で、半数近くの人たちが押し寄せる津波を目撃していました。表三は、津波を目撃された方の目撃場所です。請戸地区内外各地で津波が目撃されています。表４をみると、ほとんどの方は浪江町内に設置された避難所や親戚宅で一夜を明かしています。が、南相馬市や双葉町、東京などに避難した方もおられました。また、避難所ではなく駐車場や神社などで三月十一日の夜を過ごした方もいたようです。

その後、三月十二日になると請戸地区住民は、表五からもわかるように、ほとんどの方たちが津島へ移動されたようですが、南相馬市や福島市、郡山市などに移られた方も少なからず存在していました。十二日以降、町外避難を余儀なくされ、現在に至るまで多くの方が複数回の転居を繰り返しながら生活をされています。表二の七では、今後の移転予定として、九三名の方が移転を予定していないと回答しています。多くの方が請戸を離れ、移り住んだ各地域で新たな生活が始まっていることを示しています。

〔表一〕 請戸地区の死者・行方不明者（人）

大字	津波による死亡	行方不明	合計（当時の人口）
請戸	九五	二四	一一九（一二〇）
中浜	一三	一	一四（一九〇）
両竹	一九	二	二一（二二五）
合計	一二七	二七	一五四（二六二七）

〔表二〕 アンケート結果

Q 1	震災当日、あなたはどこにいましたか。	A	家の中・四五 家の外・三一 請戸の外・七五
Q 2	震災当日、津波を見ましたか。	A	見た・六一 流された・二三 見なかった・八九
Q 3	震災当日の晩、どこで過ごしましたか。	A	町内避難所・六八 町内親戚宅・四一 その他・四四
Q 4	震災翌日（一二日）、どこに避難しましたか。	A	津馬・八一 南相馬・二一 その他・五一
Q 5	震災翌日（一二日）夕方の東電原発一号機爆発を、いつ知りましたか。	A	一二日・七四 一三日・四七 その他・三二
Q 6	現在の住居に移転するまで、何回転居しましたか。	A	一回・四 二回・二五 三回・二二 四回・一七 五回・二五 六回・二九 七回・二二 八回・一四 九回・四 一四回・一
Q 7	今後移転する予定がありますか。	A	ある・四六 ない・九三 その他・一四

〔表三〕 津波目撃場所

場所	目撃された
請戸橋	六
役場四階	二
請戸角畑	一
太平山	一一
会社	三
南久保	一
天神ぶち	一
東電第二原発内	二
中浜地区	一
高瀬街道	四
広野火力発電	一
両竹	三
浜街道の車の中	一
自宅	三
旧請戸小地区	一
浜街道請戸小学校	一
家の裏山の上	一
請戸港	二
車の中	三
家の前の堤防	一
海岸	一
幾世橋	二
請戸川堤防	一
細谷海岸	一
富岡	一
郡山海岸高台	一
双葉町	二
無記名	三
合計	六一

〔表四〕 三月十一日の晩に過ごした場所

町内避難所	六八
町内親戚宅	四一
南相馬市	一
双葉町	二
川俣道の駅	一
東京	一
町外身内の家	三
友人宅	四
会社	六
双葉厚生病院	一
川添上原	一
いこいの村	一
いこいの村バスの中	一
町内駐車場	二
浪江警察署	一
双葉北小	一
神社	二
大平山	一
両竹の山	一
町外	一

〔表五〕 三月十二日避難先

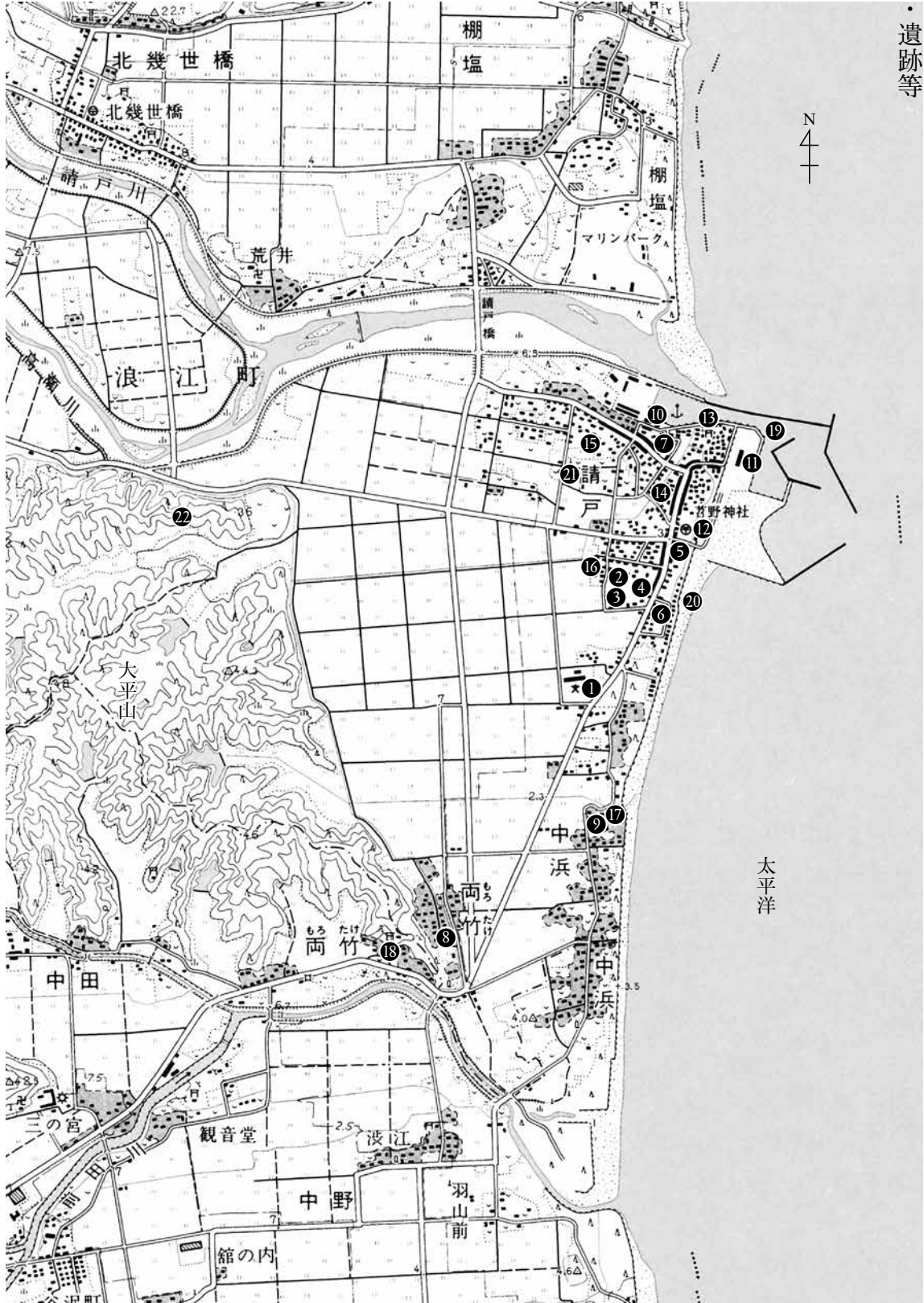
津島	八一
南相馬	二二
福島市	六
郡山市	二
二本松	三
川俣	五
船引	二
川俣高	一
荻小	二
オンフル双葉	一
川添	一
町内親戚	二
知人宅	一
会社	一
東京都	一
埼玉県	一
飯館	三
川内村	一
町内	一
末森	一

就任年	期間	区長	村長・町長
明治十二年七月二十八日〔請戸村に舩倉村が合併〕			
明治二十二年四月一日〔請戸村に中野、両竹、中浜が合併〕			
明治二十二年六月二十一日〔町村制実施により村役場を大字両竹字的場二一五に設置〕			
明治二十二年七月			佐藤綱弘（明治二十二年～二十六年）
明治二十六年	六	荒木平五郎	村長 佐藤（明治二十六年七月迄）
			村長 立野 欄（明治二十七年七月迄）
			村長 黒木（明治三十一年七月迄）
明治三十二年	四	中谷清五郎	村長 佐藤綱弘（明治三十五年七月迄）
明治三十六年	二	鈴木万之助	村長 高野重宣（明治三十八年六月迄）
明治三十八年	二	鈴木己之助	村長 酒井宗助（明治三十八年十月～四十二年十一月）
明治四十年	二	鈴木卯之吉	村長 岡田助重（明治四十一年十二月～）
明治四十二年	二	五十嵐松太郎	
明治四十四年	二	富永善藏	
明治四十四年一月十四日〔村役場を大字請戸字谷地畑一七に移転〕			
大正二年	二	島清三郎	
大正四年	二	五十嵐万之助	村長 深野隆重（大正四年～五年）
大正六年	二	酒井猪太郎	①村長 佐藤源七（大正五年八月十日～九年八月九日）
大正十年	二	鈴木周蔵	②村長 佐藤源七（大正九年八月十日～十三年八月九日）
大正十二年	四	宮川常助	③村長 佐藤源七（大正十三年八月十日～昭和二年八月九日）
昭和二年	二	熊川平助	④村長 佐藤源七（昭和二年八月十日～三年十二月二十九日辞任）
昭和四年	二	島 馨	①村長 泉田 順（昭和四年一月十五日～八年一月十三日）
昭和六年	一	菅原七之助	
昭和七年	一	吉崎鉄治	
昭和八年	二	佐山直身	②村長 泉田 順（昭和八年一月十四日～十二年二月五日）
昭和十年	六	鈴木栄治郎	③村長 泉田 順（昭和十二年二月六日～十六年二月九日）
昭和十六年	一	富谷三郎	④村長 泉田 順（昭和十六年二月十日～二十年二月十九日）
昭和十七年	四	鈴木栄治郎	
昭和二十一年	一	熊川 稔	
昭和二十二年	二	鈴木千治郎	村長 鈴木市三郎（昭和二十年二月二十八日～二十二年四月四日）

就任年	期間	区長	村長・町長
昭和二十二年			①村長 熊川 稔（昭和二十二年四月五日～二十六年四月五日）
昭和二十四年	二	富谷三郎	村長 熊川 稔（昭和二十六年四月二十三日～二十八年）
昭和二十六年	一二	渡部庚子郎	②村長 熊川 稔（昭和二十六年四月二十三日～二十八年）
昭和二十八年十月十日〔請戸村、幾世橋村、浪江町合併〕			
			町長 門馬経義
昭和三十一年五月一日〔浪江町、大堀村、荻野村、津島村合併〕			
			町長 石井 登（昭和三十一年六月十七日～三十五年六月十六日）
昭和三十三年四月一日〔双葉町へ一部編入〕			
昭和三十五年四月一日〔双葉町へ一部編入〕			
昭和三十八年	三	鈴木今朝蔵	①町長 石川正義（昭和三十五年六月十七日～三十九年六月十六日）
昭和四十一年	三	柴野昌治郎	②町長 石川正義（昭和三十九年六月十七日～四十二年六月十六日）
昭和四十四年	一〇	吉田房寿	①町長 上田鉄三郎（昭和四十三年六月十七日～四十七年六月十七日）
昭和四十四年	②町長	上田鉄三郎（昭和四十七年六月十七日～五十年十一月五日死亡）	
昭和五十四年	四	富谷正	②町長 石井 潔（昭和五十四年十二月十六日～五十八年十二月十五日）
昭和五十八年	四	坂本八十松	紺野富夫（昭和五十八年十二月十六日～六十二年十二月十五日）
昭和六十二年	一二	熊川喜久雄	
平成十一年	三	熊川 潔	①～④ 叶 幸一（昭和六十二年十二月十六日～平成十一年十一月十五日）
平成十四年	一	官野政雄	⑤ 叶 幸一（平成十一年十二月十六日～十五年十二月十五日）
平成十五年	二	佐山正義	
平成十七年	鈴木市夫		横山藏人（平成十五年十二月十六日～平成十九年十二月十五日）
			馬場 有（平成十九年十二月十六日～）

震災前の請戸の諸機関・寺社・遺跡等

- 1 請戸小学校
- 2 浪江町児童館
- 3 浪江町公民館請戸分館
- 4 請戸駐在所
- 5 請戸郵便局
- 6 請戸集会所
- 7 消防屯所
- 8 両竹集会所・消防屯所
- 9 中浜集会所・消防屯所
- 10 請戸漁業協同組合
- 11 請戸漁協新市場
- 12 苅野神社
- 13 南岳院
- 14 薬師堂
- 15 熊野神社
- 16 お壇（権現様）
- 17 白簀熊野権現
- 18 諏訪神社
- 19 請戸港
- 20 請戸海水浴場
- 21 請戸共同墓地
- 22 大平山横穴墓群



（国土地理院 二万五千分の一 磐城双葉より作成）

